

静岡県下におけるいわゆる野犬の寄生蠕虫

(1) 概況

伊藤 二郎 渡辺 強三

静岡大学教育学部保健教室

野口 政輝 望月 久 前川 藤造

静岡県立衛生研究所

(昭和33年7月15日受領)

静岡県は日本住血吸虫病、肺吸虫病流行地として既に知られていた。すなわち日本住血吸虫病は浮島沼を一带として大正時代は濃厚な蔓延地であり、現在もなほ僅少ではあるが宮入貝の存在が認められている。肺吸虫は狩野川沿岸の一带、更に最近では伊豆半島の南端にもその蔓延が知られ、それらは以前と比較しても減少したとは考えられない。さらに肝吸虫病についてはその充分な資料を見ない。これらの寄生虫は野犬にも共通に寄生しているゆえに、野犬を解剖してその寄生蠕虫を調査することは極めて有意義であろうと考えられる。すなわちそれによって人畜に共通な寄生蠕虫のより正確な分布が判明し、それに基づいて種々の予防対策の樹立も可能となる。

次に犬鉤虫、犬鞭虫およびある種の糸虫などは、いづれも犬の個有寄生虫ではあるけれども、人体の鉤虫、鞭虫、糸虫などときわめて近似の種類であるゆえに、それらの寄生虫の犬腸管内における寄生状態を解剖によって直接検査し、その結果を人体の場合に類推することは可能であり且つ有意義なことである。更に犬には犬糸状虫、瓜実条虫、そのた多くの重要な寄生虫の存在が知られており、獣医学的見地からもそれらの浸淫状態を適確に地区毎に把握することは必要である。

近年 Beaver ら(1956)によって盛んに *Larva migrans*

JIRO ITO*, KYOZO WATANABE*, MASATERU NOGUCHI**, HISASHI MOCHIZUKI** & TOZO MAEKAWA***: An investigation of the helminth parasites of dogs in Shizuoka Prefecture. (1) General aspect (* Hygiene Laboratory, Faculty of Education, Shizuoka University; ** Shizuoka Prefectural Hygiene Research Laboratory; *** Department of Public Health, Shizuoka Prefectural Office)

の問題が研究されている。すなわちそれによると、犬蛔虫、犬鉤虫などが人体に迷入し、異所寄生して種々の重篤なる症状を起すことが知られている。それゆえに犬などの寄生虫の浸淫状況を調査しておくことは、また同時に公衆衛生学上からも重要な問題である。

以上の諸観点に立つて筆者らは、静岡県下の19ヶ所の保健所で捕獲された野犬を対称に合計192匹を解剖し、それらの寄生蠕虫を詳細に検索した。本報では特に、我が国における野犬調査の研究歴をのべ、さらに本調査の一般的な概観について報告する。

本邦における野犬寄生蠕虫の研究史概要

本邦において野犬の寄生蠕虫を全般的に調査した報告は十数篇を見るにすぎない。それらのうち検便のみによつた報告としては、武藤(1920)、安藤・小堀(1926)、能勢(1939)、山下・森(1953)などをあげることが出来る。安藤・小堀(1926)は岐阜県において36頭の飼育犬を検便し、犬蛔虫卵41%、犬鉤虫卵27%、瓜実条虫卵8%、マンソン裂頭条虫卵11%、犬鞭虫卵及び横川吸虫卵をそれぞれ1例づゝ認めたほかに、更に人蛔虫卵4例(11%)を報告した。能勢(1939)は東京において500頭の犬の検便を行つて、主として犬蛔虫卵と犬鉤虫卵につき、虫卵の検出能力を検討した。山下・森(1953)は北海道の畜犬141頭を検便して合計31.2%に虫卵を発見し、犬蛔虫、犬鉤虫、犬鞭虫の寄生率と犬の年齢との関係を報告している。

一方、犬の寄生虫を検便のみによつて調査することは種々の都合上やむを得ないことではあるけれども、検便成績と実際の寄生虫の有無とは可成り異なる結果をもたらすことを豊田(1928)、吉川ら(1938)が強く指摘した。すなわち豊田(1928)は京都、大阪、奈良の三府県

にまたがって 311頭の野犬を直接解剖し、更に同時に検便をも行って両方の成績を比較した。更に同氏は検出された種々の寄生虫の季節的關係を報告した。吉川ら (1936) は神戸市の野犬 150頭を、更に1938年には同地区の野犬 300頭を、解剖と検便によつて種々検索し、各寄生虫の虫体数、犬年齢との關係などを詳細に報告した。その後吉川ら (1940) は既報における犬寄生吸虫類の種名を訂正して、前回報告の *Echinochasmus perfoliatus*, *Clonorchis sinensis*, *Metagonimus yokogawai*, *Plagiorchis muris* の4種の他にさらに新しく *Echinochasmus japonicus*, *Heterophyes nocens*, *H. continus*, *Metagonimus ovatus*, *M. katuradai*, *Monorchotrema yoko-*

gawai Pygidiopsis summus の7種を追加した。

専ら解剖によつて野犬の寄生蠕虫を調査した報告に、戸張 (1938), 古賀 (1952, 小腸のみ), 岡部ら (1952), 徳毛 (1954, 小腸のみ), 岡野 (1957) などを見る。戸張 (1938) は東京の犬 404頭を解剖して詳細な検索をなし、犬の年齢、季節との關係、寄生虫体数、寄生部位、虫体の性比などを比較検討し、更に犬蛔虫の体長の計測をもなした。古賀 (1952) は福岡市において 400頭の野犬の小腸を検索し、10種の寄生虫を認めて報告したが、その中には狐中殖条虫、拡張条虫の二種を新たに記録している。岡部・古賀 (1952) は同年佐賀県の犬 365頭を剖検して16種の寄生虫を認めて報告した。徳毛 (1954) は

Table 1. Comparison of infection rate dog of parasites reported by several authors in Japan

Authors	Toyota	Yoshika-wa et al.	Yoshika-wa et al.	Tohari	Koga	Okabe et al.	Tokumo	Okano	Present authors
Year	1928	1936	1938	1938	1925	1952	1954	1957	1958
Locality	Kinki	Kobe	Kobe	Tokyo	Fukuoka	Saga	Hiroshima	Kyoto	Shizuoka
No. of Dogs	311	150	300	404	400*	365	260*	255	192
<i>Toxocara canis</i>	42.4	19.3**	24.7	55.9	16.3	27.4	24.7**	15.3	6.8
<i>Ancylostoma caninum</i>	71.4	64.8	78.9	63.3	77.3	47.7	47.3	52.9	84.9
<i>Trichuris vulpis</i>	20.3	51.3	55.1					15.7	31.7
<i>Dirofilaria immitis</i>	2.9	29.3	21.4			11.5		27.8	36.4
<i>Gnathostoma spinigerum</i>						0.6			
<i>Spirocerca sanguinolenta</i>								0.8	1.6
<i>Acanthocephala</i> sp.						0.3			
<i>Schistosoma japonicum</i>						2.7			
<i>Clonorchis sinensis</i>	6.2	0.3	0.7			6.3			
<i>Paragonimus westermanii</i>	1.6								5.2
<i>Metagonimus yokogawai</i>			8.4		14.5	53.7***	11.9	0.4	23.3***
<i>Echinostoma cinetorchis</i>						1.1			
<i>Echinochasmus perfoliatus</i>			0.3	0.3					
<i>Plagiorchis muris</i>			5.7			0.6			
<i>Pygidiopsis summus</i>					1.0	2.2	10.8		
<i>Heterophyes</i> spp.	8.4		3.7		1.5	1.6			
<i>Pseudoheterophyes continua</i> (major)						1.9			0.5
<i>Dipylidium caninum</i>	64.0	82.8	74.6	37.4	65.8	10.1	52.0	34.5	45.7
<i>Diphyllobothrium mansonii</i>	5.8	1.3	0.3	0.5	4.5	12.5	1.9	1.2	3.6
<i>Taenia taeniaeformis</i>						18.8			6.8
<i>Taenia pisiformis</i>				1.0	2.0			4.7	0.5
<i>Taenia hydatigena</i>	0.3						1.5	0.8	
<i>Mesocostoides</i> spp.						0.5 (<i>M. lineatus</i>)			0.5 (<i>M. litteratus</i>)
<i>Moniezia expansa</i> ?					0.3				
Total percentage	98.4	96.7	99.7		95.5	91.8	85.0	77.1	100.0

Foot note : * examination of only dog intestine
 ** *Toxacaris leonina* is contained
 *** *Metagonimus takahashii* is contained

呉地方の野犬 260頭の腸管を検索して7種の寄生虫を報告し、それらと犬年齢との関係、虫体数とその性比などを検討した。近年岡野 (1957) は京都市の野犬 255頭を解剖して10種類の寄生虫を認め、特に犬鉤虫の体長と寄生部位の関係を詳細に検討して報告した。以上解剖による8氏の成績の概要と、筆者らの今回の結果をあわせて第1表に一覧表をかゝげた。

以上にのべた報告例は犬の寄生虫の総括的考察のみをあげたものであるが、特定の目的をもって或種の寄生虫を検索した報告例は甚だ多い。即ち犬糸状虫の調査、肺吸虫の調査、住血吸虫、顎口虫、マンソン裂頭条虫などの如く多方面にわたるのであるが、それらについては紙面の都合上此処ではのべない。

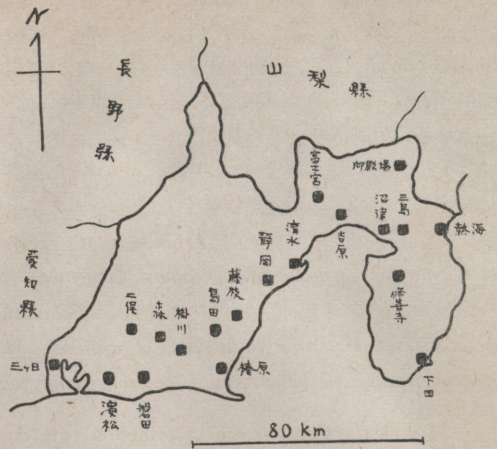
調査方法

県下の19ヶ所の保健所から各々10頭内外の捕獲された野犬を衛生研究所にはこび、翌日電殺し、それらの年齢、性別、品種、産地、栄養状態などを記録した。電殺したのち、最初に肛門部から糞を圧出して検便の用に供した。その後たゞちに解剖に附し、内臓諸器官を検索して寄生虫の有無を調査した。すなわち咽喉、食道、胃は反転して特に顎口虫に注意し、気管、肺は細切して肺吸虫に注意し、心臓及び近接血管は充分切開して犬糸状虫に注意し、更に胆嚢、肝臓は細切して肝吸虫の発見につとめた。また腸間膜血管を精査して日本住血吸虫の有無を確かめ、最後に十二指腸、空腸、廻腸、大盲腸の4部分に分けられた部位の腸内寄生虫を検した。腸内の検査に際しては、大型尿コップの中に水道水を若干入れ、その中に各部位毎に分けられた腸管を入れて縦に切り開き、軽くすゝいでからその腸管をとりだして咬着虫体を検査した。一方、尿コップ内の水は糞などの夾雑物を除去したのち数回洗滌し、濾過し、その濾液については微小吸虫類を、その残渣については大型の蠕虫類を検した。

糞便の虫卵検査では AMS III 法を用い、18×24 mm の被蓋硝子一枚の検査によつた。

調査成績概要

第1図に静岡県下19ヶ所の保健所の所在位置を示した。1956年7月から1957年7月にわたり、各保健所から10頭内外の野犬を集めて総計 192頭を剖検した結果、寄生蠕虫の総合寄生率は 100%に達し、陰性の犬は遂に認められなかつた。その内訳は線虫類5種、吸虫類4種、



第1図 静岡県略図

条虫類5種で、合計 14種類に及んだ(第1表参照)。最も多いのは犬鉤虫でその寄生率84.9%を示し、ついで瓜実条虫45.7%、犬糸状虫36.4%、犬鞭虫31.7%、メタゴニムス属吸虫23.3%の如くであつた。更に犬蛔虫、肥頭条虫はいずれも 6.8%の寄生率を示し、ついで肺吸虫 5.2%、マンソン裂頭条虫 3.6%、血色食道虫 1.6%となり、残りの3種 (*Taenia pisiformis*, *Pseudoheterophyes continua major*, *Mesocestoides litteratus*) はいずれも1例づゝ (0.5%) であつた。したがつて只1種のみ寄生虫によつて寄生されている野犬は少く、他の大部分の野犬は2種類以上の寄生虫をもち、総平均すれば1頭の犬につき 2.5種類の寄生虫の割合であつた。それらの重複寄生の様相と犬年齢との関係をば特に 182頭について第2表に示した。おのおの種類の寄生虫が犬に対

Table 2. Relation between the age and the number of cases of double infection

Age of dogs	No. of dogs examd	Number of dogs infected with					
		1sp.	2spp.	3spp.	4spp.	5spp.	6spp.
1 age	43	8	17	16	2		
2	53	11	16	17	6	3	
3	51	7	19	17	5	2	1
4	26	2	12	9	2	1	
5	3				2	1	
6	4		3	1			
7	1				1		
8	0						
9	1	1					
Total	182	29	67	60	18	7	1

する年齢抵抗の様相が一様でないから、総計すること自体に困難性はあるが、第 2 表を通覧すると、概して犬年齢の進むにしたがって多くの種類の寄生虫を同時に持つ傾向が認められ、その相関係数は+0.12であった。なお重複寄生の場合の種類の組合せを検討した結果は、犬鉤虫、瓜実条虫、犬糸状虫などの寄生率の高い種類の組合せが最も多く、特定の種類の寄生虫同志がお互いに拮抗的に作用する事は認められなかった。このことは豊田 (1928)、古賀 (1952) その他多くの報告例と一致していた。

上述各種寄生虫の県内における分布状態を第 3 表に要約して掲げた。すなわち野犬はそれ程遠隔地に移行しな

どを調査し、それらと寄生虫との関係を検討したが、ここでは犬の種類についてのみ記述し、年齢性別などについては各寄生虫の種類毎に第 2 報以下でのべる。182頭の犬は悉く雑犬で、純系は全く居なかった。雑犬を判定し出来る限り系統別に分けてみると、日本犬系 6 頭、セバード系 5 頭、芝犬系 3 頭、テリア系、セッター系各々 2 頭、ビーグル系、ピングポインター系および秋田犬系が各々 1 頭で、他の 161 頭は悉く系統不明の雑犬であった。それらと寄生率との関係を各種類の寄生虫毎に χ^2 検定を試みたが、いづれにも有意の差を認めなかった。すなわち或種の寄生虫が特に或品種の犬に寄生しやすいという様なことは今回の資料から認められなかった。

Table 3. Geographical distribution of dog parasites in Shizuoka Prefecture

Locality	Shimoda	Shuzenji	Atami	Gotemba	Mishima	Numazu	Yoshiwara	Fujinomiya	Shimizu	Shizuoka	Fujieda	Haibara	Shimada	Kakegawa	Mori	Iwata	Futamata	Hamamatsu	Mik-kabi	Total	Percentage	
	No. of dogs examined	10	10	10	10	10	9	9	10	10	10	10	10	10	10	10	9	15	10			192
<i>Toxocara canis</i>	1	1	2	2		2				1			2		1				1	13	(6.8)	
<i>Ancylostoma caninum</i>	6	6	10	9	8	9	9	5	10	10	10	8	5	9	8	8	9	15	9	163	(84.9)	
<i>Trichuris vulpis</i>	2	3	5		7	8	5	7			1				1	5	3	13	1	61	(31.7)	
<i>Dirofilaria immitis</i>	1	2	1		6	2	3	5	3	5	2	7	5	5	2	4	4	9	5	71	(36.4)	
<i>Spirocerca sanguinolenta</i>															1		2			3	(1.6)	
<i>Paragonimus westermanii</i>							1*				3		1	3	1	1*				10	(5.2)	
<i>Metagonimus</i> spp.			1	2	2	4			1	2	3	3		8	2	2	5	2	5	3	45	(23.3)
<i>Pseudoheterophyes continua major</i>																			1	1	(0.5)	
<i>Taenia taeniaeformis</i>	5				1	1						1							3	2	13	(6.8)
<i>Taenia pisiformis</i>																				1	1	(0.5)
<i>Mesocostoides litteratus</i>																				1	1	(0.5)
<i>Dipylidium caninum</i>	5	7	3	7	6	4	3	4	2	5	3	5	5	3	9	3	1	10	3	88	(45.7)	
<i>Diphyllobothrium mansonii</i>	1	1							1	1	1			2						7	(3.6)	

* No worm but the egg was observed

いと仮定して、各保健所を県の東部から西部に併列した結果である。各地区毎の解剖犬数が充分でないで確たる断定は出来ないが、2~3の認め得た傾向をあげると、犬鞭虫は県中部に少く、犬糸状虫は伊豆地方に少いことが認められた。肺吸虫は既知の流行地たる東部にむしろ少く、反対に藤枝、島田、掛川、森、磐田などの県西部に広く発見されたが、此のことは肺吸虫病対策上重要なことである。それに比例して横川吸虫も亦県西部に濃厚に分布している事が認められた。そのたの寄生虫については特に著しい傾向が認められなかったが、詳細については第 2 報以下でのべる。

182頭の野犬については特に犬の種類、年齢、性別な

173頭の野犬については特に剖検と同時に AMS III 法による検便を行つたが、おもなる寄生虫について剖検結果と検便結果を比較して第 4 表に掲げた。豊田 (1928)、吉川ら (1938) の指摘せる如く、両者の成績は常に一致せず、虫卵陽性率が解剖結果より高いのが犬蛔虫、犬鞭虫、肺吸虫、横川吸虫などに見られ、反対の場合が、犬鉤虫、肥類条虫などに見られた。然し、些細に検討してみると、虫卵の疑陰性(虫体十、虫卵一)例を疑陽性(虫体一、虫卵十)例が相殺して最後の結果が近似的であり、実際に虫体陽性例と虫卵陽性例が一致することが割合に少い結果が認められた。殊に著しいのはマンソン裂頭条虫、犬蛔虫、犬鞭虫などであった。それらの虫体数など

Table 4. Comparison between the result of autopsy and that of fecal examination
(Number of dogs examined is 173)

Species of parasite	No. of positive by autopsy (%)	No. of positive by fecal exam. (%)	Details		
			Worm pos. ova pos.	Worm pos. ova neg.	Worm neg. ova pos.
<i>Toxocara canis</i>	12 (6.9)	15 (8.7)	7	5 [†]	8
<i>Ancylostoma caninum</i>	144 (83.2)	130 (75.2)	127	17	3
<i>Trichuris vulpis</i>	56 (32.4)	70 (40.5)	44	12	26
<i>Paragonimus westermanii</i>	8 (4.6)	10 (5.8)	8	0	2
<i>Metagonimus</i> spp.	40 (23.1)	51 (29.5)	37	3	14
<i>Taenia taeniaeformis</i>	13 (7.5)	4 (2.3)	4	9	0
<i>Dipylidium caninum</i>	83 (48.0)	0	0	83	0
<i>Dipyllobothrium mansonii</i>	6 (3.5)	6 (3.5)	1	5	5

との関係については第2報以下でのべ、此処では概略だけにとどめる。

なほ、各寄生虫の虫体数、性比、寄生部位、犬の年齢性別との関係、季節的關係などは総べて第2報以下にのべる。

考 察

静岡県において野犬の寄生虫調査が実施されたのは本報が最初であり、しかも総合寄生率が100%を示したのも最初であらう。勿論第1表に示した如く諸家の報告も90%を前後する結果であり、総じて犬の寄生虫の蔓延状況は非常に高いことが窺われる。寄生虫の種類別にみても県下の野犬は一般に高率のものが多く、特に犬鉤虫、犬糸状虫などが高率を示している。

他方、日本住血吸虫は、沼津、吉原地区が浮島沼を控えているので或いは検出できるものと期待したが遂に認められなかった。また住民の虫卵検査では往時に僅少ながら肝吸虫卵が証明されていたが、今回の192頭の野犬からは発見されなかった。すなわちこれらの寄生虫は現在では非常に稀になっているものと考えられる。それとは反対に、肺吸虫が意外に広範囲に、且つ可成り高率に検出されたことは注目に値するもので、その予防対策の急務なることは明らかであろう。静岡県の肺吸虫の分布に関しては、榛原郡地方の高木(1926)、狩野川沿岸の高亀ら(1942)、南伊豆地方の横川ら(1957)の諸報告をみるのであるが、それらを再確認してさらに詳細な分布調査が望まれるゆえんである。

虫卵検査の所見と解剖による所見のくい違いは予想以上に大きい。虫体が寄生して居ても虫卵が発見できない原因については今迄にもいろいろな理論的根拠があたえられているが、今回の調査によると、むしろ反対に虫体

が寄生して居ないにも拘らず虫卵が陽性になる例が相当にある。殊に犬蛔虫、犬鞭虫、マンソン裂頭条虫などが顕著である。稀には産卵後母虫が死滅消失して、虫卵のみ残る場合が考えられるが、多くの場合は一過性の虫卵の混入によるのであろうか。それを裏書きする例として、犬の検便の報告例(安藤ら、1926:宮川、1927:豊田、1928)には屢々人蛔虫卵、人鞭虫卵などが記録されており、筆者らも人蛔虫卵若しくは豚蛔虫卵と思われるものを2例(後報参照)検出している。勿論これ総べて解釈ができるとも思われず、これに関しては今後の研究が望まれる。

要 約

- 1956年7月から1957年7月にわたり、静岡県下19ヶ所の保健所から合計192頭の野犬を集めて寄生蠕虫の検索を実施した。
- 192頭の解剖所見によると総合寄生率は100%に達し、寄生蠕虫の種類は14種に及んだ。また各頭の犬は平均2.5、最高6種類の重複寄生をうけていた。
- 野犬の品種系統と寄生蠕虫の間には特定の関係が認められなかった。
- 主なる寄生虫は犬鉤虫、瓜実条虫、犬糸状虫などであったが、殊に肺吸虫が県西部の方にかかなり広汎に認められた。
- 173頭の野犬では特に虫卵検査もあわせて実施したが、その所見と解剖所見との差異は注目に値する。
- 現在迄の我国における野犬調査の主なるものの史的考察を行った。

本研究をなすにあたり、野犬の運搬、解剖などの労をとられた県衛生部、各保健所の係員の多くの方々衷心

から謝意を捧げる。殊に衛生研究所の村上正博技師、河野敏雄技師、山田淳一技師、及び静岡大学学生各位に対し厚く御礼申上げる。尙条虫の鑑定之労をとられた奈良学芸大学の沢田勇助教授に深謝の意を捧げる。

本研究の一部は 1957 年日本寄生虫学会第 26 回総会で発表した。

文 献

- 1) 安藤亮・小堀鉦太郎(1926)：岐阜県下肺ヂストマ病流行地における犬猫の糞便検査成績について、愛知医誌，33(4)，619-634。—2) Beaver, P. C. (1956) : Larva migrans (Parasitological Reviews). Exptl. Parasitol., 5(6), 587-621。—3) 古賀元晁(1952)：福岡市の犬小腸内寄生虫について、日寄記事，21, 27-28。—4) 高亀良彦・島本茂太郎(1942)：伊豆温泉地帯を流るゝ狩野川産「モクツガニ」を中間宿主とする肺臓「ヂストマ」，日寄記事，14, 74-76。—5) 高亀良彦・堀口武二郎(1943)：伊豆狩野川産「モクツガニ」を中間宿主とする肺臓ヂストマの研究(2)，日寄記事 15, 50-51。—6) 武藤昌知(1920)：肝臓ヂストマ病流行地域に於ける犬，猫の糞便検査成績並に本吸虫と鼠との関係，東医新誌，2188, 1-10。—7) 能勢勇一(1939)：犬の腸内寄生虫と駆虫薬について(第 1 報告)，日本医大誌，10(1)，58-66。—8) 岡部浩洋・古賀靖造(1952)：佐賀県における犬の寄生蠕虫に就いて，久留米医誌，15(9-10)，637-639。—9) 岡野薫(1957)：京都市に於ける所謂野犬の寄生虫について(2)，寄生虫誌，6(3-4)，358。—10) 高木三平(1926) 静岡県榛原郡下に於ける二・三の寄生虫に就て(第二報)特に肺ヂストマの第二中間宿主に就て，愛知医誌，33(1)，85-92。—11) 戸張寅之助(1938)：犬腸内寄生虫知見補遺，慶応医学，18(1)，89-95。—12) 徳毛誠三(1954)：異地方野犬小腸内寄生虫に就て，広島医学，7(6)，218-222。—13) 豊田一長(1928)：犬猫の寄生虫に就いて，動雑，40(479)，357-371。—14) 山下次郎・森奪須(1953)：北海道に於ける家畜家禽寄生虫病流行状況実態調査 II，札幌市内畜犬に就

いての調査，寄生虫誌，2(1)，21-22。—15) 吉川元久・西村真二・上杉茂(1936)：神戸市の犬寄生虫に就いて，中央獣医誌，49(7)，607-616。—16) 吉川元久・西村真二・上杉茂(1938)：神戸市の犬寄生虫に就いて II，中央獣医誌，51(6)，535-543。—17) 吉川元久・宮田彝徳・上杉茂(1940)：神戸市に於ける野犬寄生吸虫類に就ての知見補遺，日本獣医誌，2(4)，450-464。—18) 横川宗雄・吉村裕之・小山千万樹・佐野基人・鈴木重一(1957)：南伊豆地方における (*Paragonimus ohvrai* Miyazaki, 1939) 大平肺吸虫の分布，東医新誌，74(1)，17-20。

Summary

Parasitic helminth of 192 dogs in Shizuoka Prefecture was examined by autopsy in the period from 1956 to 1957. The general feature of this investigation with the review of such reports by early Japanese investigators was presented in this paper. All dogs autopsied were exclusively parasitized with one or six species of helminth, which were composed of five species of nematodes, four species of trematodes and five species of cestodes. The highest infection rate was 84.9% of *Ancylostoma caninum*, which was followed by 45.7% of *Dipylidium caninum*, 36.4% of *Dirofilaria immitis*, 31.7% of *Trichuris vulpis*, 23.3% of *Metagonimus* spp., and so on. It was noticed that remarkable high infection rate of *Paragonimus westermanii* among the dogs was revealed. The other few species were as follow; *Toxocara canis*, *Spirocerca sanguinolenta*, *Pseudoheterophyes continua major*, *Taenia taeniaeformis*, *Taenia pisiformis*, *Mesocestoides litteratus*, and *Diphyllobothrium mansonii*. Special comparison between the result of autopsy and that of fecal examination was also carried on with its brief discussion about 173 dogs. The details of each parasites are now in press in the following paper of this series.